

# プロトタイプ理論を用いた多義語分析と語彙習得

白 以然

## 要 旨

多義語分析および第 2 言語習得に最近よく応用されているのがプロトタイプ理論である。プロトタイプ理論は 1 つのカテゴリリーは典型的な成員、即ちプロトタイプを中心として構成されていると想定する。従って、多義語の意味分析において、多義語の成す意味 1 つ 1 つは同じ位置を占めているのではなく、中心的な意味から周辺へと拡張されるという。このような言葉の内部構造が第 2 言語習得に与える影響をみる研究もある。Shirai(1995)は「PUT」のように基本的な英語動詞に関する学習者の認識を調査し、様々な項目において母語話者とは違うことを明らかにしているが、ここで大きい変数となったのが母語の語彙と目標言語の当該語のプロトタイプ性であった。Shirai(1995)は、プロトタイプ度が高いと母語転移が起こりやすく、習得もしやすいが、周辺的な意味はそうではない可能性があることを示唆している。多義語の様々な意味を暗記させるよりは、言葉の内部構造を明らかにし、よりわかりやすく提示することが一つの代案として考えられる。

## 【キーワード】

プロトタイプ理論 多義語分析 意味の拡張 第 2 言語習得

## 1. プロトタイプ理論と多義語分析

プロトタイプとは辞書的な意味として「模範」・「原型」を指す。1 つのカテゴリリーの成員のうち、そのカテゴリリーの性格を最もよく表す典型的なものであるといえる。プロトタイプ理論は、1 つのカテゴリリーの成員の均質的な位置づけとカテゴリリー間の絶対的な境界を想定する古典的なカテゴリリー理論への反作用として出発した。1 つのカテゴリリーがあれば、その中には中心的な例と周辺的な例が存在する。カテゴリリーはプロトタイプ的な成員、即ち典型的な例とそうではない例でなされていることになる。各成員が当該のカテゴリリーにおいて同じ重さを持つわけではなく、カテゴリリーには内部構造が存在し、典型的な例を中心として拡張される。

このような理論は多義語分析にも有用な示唆を与える。辞書のように多義語の様々な意味を羅列するのではなく、プロトタイプ的な意味を中心とした意味間のつながりを分析し、多義語の意味構造を究明することである。

多義語の各意味の間には<図 1>のようになんらかの関係があり、その意味 1 つ 1 つは最もプロトタイプ的な意味から拡張されていると見ることができる。従って、拡張義 3 と 1-1 とは一見あまり関係がなさそうに見えるかもしれないが、1 つの語彙(マーカー)で標示されるからには、その中に意味のつながりがあると想定できる。

## 2. 拡張の原理

このような意味の拡張における動機付けは恣意的に行われるのではなく、人間の認知作用と深く関わるとされる。レイコフ(1987)は拡張の動機付けの主な原理を 3 つ挙げている。

第 1 はメタファー（比喩）である。これは類似性に基づいて、一方の形式で他方を表現することである。

1. 彼女は職場の花だ。
2. 遠い昔

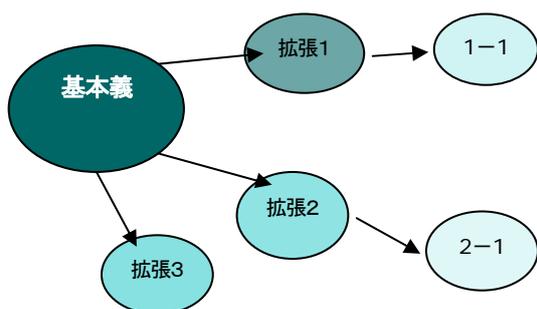
1 の場合、「目に付く美しいもの」ということが植物の「花」と「彼女」の共通点をなしている。2 の場合、空間的な距離を表わす言葉が時間を表わすことに使われている。より認知しやすい空間的な概念を借りて、目には見えない時間概念を表わしていることである。

第 2 はメトニミーで、隣接しているものを持って、あるものを指すことである。

3. 漱石を読む。(著者⇒本)
4. We don't hire long hair. (髪⇒人)

メタファーとは違って、「漱石」という人間と彼が書いた「本」は「共通した要素」を持っているわけにはいかない。4 の場合、髪型でその髪型をしている人を

<図 1> 意味の拡張



表わす。このように隣接性を使ったメトニミー表現は日常の中でよく見かけられる。

第3はイメージスキーマで、人間の繰り返された経験に基づいたイメージを指す。

5. He is in a living room. (物理的な空間)

6. He is in a good mood. (心理的な空間)

in とは、もともと何か物理的な空間の中にある状態を表わす。この容器のようなものが繰り返された体験によって抽象的なイメージを形成し、他の概念も表現するようになったことである。

### 3. プロトタイプ理論を用いた語彙分析

以上のように、レイコフは、多義語は基本的なプロトタイプの意味を中心に、そこから様々な意味へと拡張されるといい、それを「over」などの分析を通して証明する。ここでは、前置詞と同様、日本語学習者を悩ませる日本語の格助詞の1つ、「本」の分析に簡単に触れてみる。

レイコフ(1987)は、この「本」の様々な意味をメタファーとメトニミー拡張から分析する。まず、最も基本的で中心的な例は「鉛筆1本」「3本の木」のように堅くて細長いものをそのまま表わすことである。「本」はこれをプロトタイプとして様々な意味へと拡張される。

7. サイダー1本を飲んだ。(メトニミー)

7は細長い瓶に入っているサイダーを飲んだということで、サイダー自体が長いものではない。それが入っている瓶が細長いものであるのでメトニミーといえる。

「電話1本」のような例は細長い線を通して相手に伝えられることからメトニミーとも見られるが、空間的な概念をコミュニケーションに適用しているのでメタファーとも見られる。

一方「ホームラン3本」のようなものはボールが描く細長い軌跡をイメージスキーマ的にとらえたものである。このような分析は、松本(1991)などで、もっと精緻化されている。

### 4. 第2言語習得とプロトタイプ

多義語の内部構造とプロトタイプ性を第2言語(以下L2)の語彙習得と関連付けた先駆的な研究にはKellerman(1979)がある。彼はオランダの英語学習者に母語BREKEN(英語のbreakにあたる)の入った様々な文を見せ、それが英語のbreakで表現できるかを聞いた。その結果、被験者たちは比較的典型的な例に関して直訳できると答えた。即ち、母語のプロトタイプに

近い「He broke his leg」「she broke his heart」のような項目(無標)は転移可能性が高いことがわかったのである。反面、「Some workers have broken the strike」のような文は翻訳できないという答えが多かったので、転移可能性が低いと思われる。このようにKellerman(1979)は母語文を対象に多義語の内部構造が語彙習得に影響を与えられる可能性を探求した。

これに対して、Shirai(1995)は被験者のL2に当たる英語文の正誤を判断させた。被験者は日本語を母語とする英語学習者で、「PUT」を使った英文20項目を判定させた。その結果、L1・L2共にプロトタイプのもは受容度が高かった。これに対し、L1・L2でプロトタイプではないものは受容度が低かった。また、母語の「置く」にはない項目の場合、L2のプロトタイプに近い項目の場合は習得が早く、L2の非プロトタイプ的な項目は習得しにくいことがわかった。これを整理すれば、L1のプロトタイプ性は転移可能性と関連し、L2のプロトタイプ性は習得可能性と関連することとなる。

### 5. 韓国語話者の複合動詞「～出す」の例

今までプロトタイプ理論を概観し、それを利用した英語のL2習得に関する研究を見たが、白(2005)は韓国語を母語とする日本語学習者を対象に似ている調査を行った。対象となった語彙は学習者に難しいとされる複合動詞のうちの後項「～出す」であった。

#### 5.1 「～出す」と「～내다(naiad)」

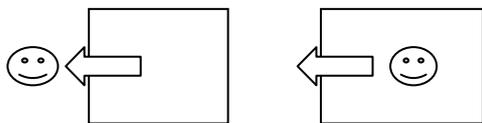
姫野(1999)によると、「～出す」には3つの意味がある。第1が「外部への移動」で「追い出す」、「引き出す」、「取り出す」などである。2番目が「顕在化」で、ものの出現を表わすこと、すなわち「書き出す」、「作り出す」、「思い出す」のようなものである。そして3番目が時間のアスペクトで「開始」の意味である。

具体的な移動を表わす基本義が、容器のイメージスキーマを介して拡張し、抽象的な出現の意味へ、また、その出現の意味が文法化し、事態の生起というアスペクトの意味へ発展したと考えられる。

ここで、被験者の母語である韓国語をみると、似ている複合動詞の後項「～내다(naida)」が存在する。意味も「移動」が時間のアスペクトへ発展するなど類似点が多い。しかし、「～내다(naida)」の場合、アスペクトとして時間の「完遂」を表わすという差がある。

このように、逆の意味である「開始」と「完遂」が「外への移動」という同じ基本義から派生していることは興味深い。このような差は<図2>のような視点の差のためであると思われる。

〈図2〉開始の「～出す」と 完遂の「～내다」



「～出す」は外の視点を取ることによって何かの生起を表わすが、「～내다」は中から移動を見ているので、何か自分の領域から出た、そのことが完遂したという意味として取られるわけである。

## 5.2 実験の概要と結果

ここで、韓国人学習者(以下学習者)を対象にして、「～出す」の入った文を評価してもらった。参考として日本語母語話者にも同じ項目を判定させた。学習者は日本語専攻の3年生以上の64人で、日本語能力試験1級27名(42%)、2級17名(27%)の中上級学習者集団であった。

問題22項目は全部「～出す」を使った日本語文で、半分は移動と顕在化の意味を表わす自然な文であり、また半分は日本語にはない「完遂」の意味を含んでいる不自然な文であった。

実験の結果、日本人は受容と非受容がはっきりしていたが、学習者の場合、受容と非受容の区別があまりされておらず、特に、日本人は非受容した「完遂」の意味の受容度が高かった。

学習者が書いた主な受容の理由を見ると次のようである。

- ①「外へ向いた具体的な動作」(取り出す)
- ②「何か具体的なものが出る」(作り出す)
- ③「何か努力によって完遂するもの」

③を見ると学習者は母語の意味をL2にそのまま適用する傾向があることがわかる。しかし、学習者が「完遂」の意味を持つ11項目を一時的に受容したことはない。項目によって受容度は変わっていた。

8.北の寒い冬を彼は耐え出した。(31%受容)

9.これで庭の雑草は全部抜き出したね。(90%受容)

8は9より受容度が低かったが、「耐え出す」は移動とは関係ない、純粋な「完遂」を表わす項目であるのが原因として考えられる。反面、9はあることを「移動させる行動の完遂」を表わしている。従って、これは「移動」を表わすプロトタイプとして受け入れられた可能性が高い。これに対して日本語母語話者はどちらの場合もほとんど受容していなかった。

また、自然な文の場合、「飛び出す」(92%)、「引き出す」(89%)、「取り出す」(85%)のほうが、「考え出

す」(75%)、「探し出す」(75%)、「照らし出す」(54%)などより受容度が高い傾向があった。具体的な移動が想定されている項目のほうが習得と意味の推測がしやすかったと思われる。

もちろん、このような受容度実験においては、学習経験も重要な変数となる。初級段階から導入される「思い出す」は95%の受容度を示しているが、これはTanaka & Abe(1984)が「学習者の判断は個別のケースにより制限される傾向がある」といったことから予想できる。チャック化、学習経験などが影響を与えるので、すべての項目の結果を必ずしも予想できるとは限らない。

このように、学習者の意味領域は、母語の該当語に関する認識、プロトタイプ度、学習経験などに影響されるので母語話者とは違うものとなっていた。

## 6. 終わりに

今まで、プロトタイプ理論を簡単に紹介して、それを使った語彙分析とL2習得との関係に関して簡単に述べた。

母語話者は長い間、その言語に接した経験から自然に語彙の意味構造を習得し、プロトタイプと周延的な意味を1つの語彙として統一的に把握(一般化)しながら、隣接語との境界を認識する。

しかし、学習者にはそのような自然な使い方の習得が難しく、特に多義語の様々な意味を習得することは、単純暗記のみでは限界があると思われる。語彙の習得には母語とL2の違う意味領域、語彙の構造が複雑に絡み合っているからである。

より効果的な語彙習得のためには、辞書のように意味を羅列して、そのまま言葉を暗記させること以上の、言葉を理解させる方法が必要であるだろう。中心的な意味とその派生過程を説明したり、母語の当該語との意味の差を明示的に説明することも1つの代案として考えられる。

それをためには、より多くの多義語に関する分析、そしてよりわかりやすい提示の仕方への研究が求められると考える。

## 参考文献

- 今井 忍 1993 「複合動詞後項の多義性に対する認知的意味論によるアプローチ-「～出す」の起動の意味を中心にして」『言語学研究』12 pp.1-24 京都大学言語学研究所  
河上誓作 1996 『認知言語学の基礎』研究社  
白 以然 2005 『複合動詞「～出す」の習得-韓国語母語

- 話者と中心に』未公開 お茶の水女子大学修士論文  
姫野昌子 1999 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房  
松田文子 2004 『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房  
李 暲洙 1996 「日韓両語における複合動詞「-出す」と「-내다」の対照研究—本動詞との関連を中心に—」『日本語教育』89 pp.76-78  
Shirai Y. 1995. the acquisition of the basic verb Put by Japaneses EFL learners: prototype and transfer 語学教育研究 12 大東文化大学, pp.61-92  
Tanaka, S. and Abe, H. 1985 Conditions on interlingual semantic transfer. In Larson, P., Judd, E.L., and Messerschmitt, D.S.(eds.), pp.101-120  
Kellerman, E. 1979 Transfer and non-transfer: where we are now. Studies in second language acquisition2, pp.37-59.  
Lakoff, G. 1987 WOMEN, FIRE, AND DANGEROUS THINGS (池上 他訳 1993 『認知意味論』紀伊国屋)

べく いよん／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻  
baekiyun@yahoo.co.jp